週間金曜日より
（2007年2月16日版 No.642）

『金曜日』で逢いましょう

新しい核時代のパンドラの箱開くのを止められるのは日本の市民

水俣病の写真記録で知られるアイリーン・美緒子・スミスさんは今、原発とプルトニウム利用に反対する運動に取り組んでいる。

京都にある環境NGO「グリーン・アクション」が活動の拠点である。取り組みの方法はユニークで「国内や海外の同様なグループと情報交換し、ネットワークを結び、解決策を探るのです」。

市民グループだけでなく、世界各地の研究所やメディア、議員などの間に必要な情報を行き来させることを目指している。

アイリーンさんは一九七〇年代の初めに熊本県水俣に住み、水俣病の記録を続ける中で、「本当のことを知っているのは現場の人たち。この人たちがネットワークをつくり、被害者と各地の人たちを結ぶ交流で自主的な運動ができたことに多くを学んだ」。

その後、カナダでも水俣病が起こり、医者や患者たちの交流で政府の権威主義的な被害の過小評価を覆していったことを見て、「ネットワークの力はすごいと感じたんです」。

七九年にスリーマイル島の原発事故が起こり、通算で一年近く現地に滞在し取材した。一方、米国政府の何千枚もの調査報告書の中で、住民に関する報告は一枚半ほどしかなく、しかもその内容は人に害が及ぶ放射能排出はなかったというものだった。

放射能の影響を過小評価するこうした姿勢のおおもとは、「原爆を投下された広島、長崎の調査がいかにも権威的で、本当に苦しんでいる被爆者の症状や訴えを無視したからです」。

同様に「権威主義でできた被害者の経験を反映しない政府のスリーマイル島事故報告書が真実で、それに当てはまらない市民の訴えは『無知な市民が騒いでいる』という政府の態度に強い不信感を持った」。それが原発の危険性に関心を持つきっかけとなり、記録から運動へと転換した。

今、日本のプルトニウム利用反対に重きを置いている理由は、「非核兵器国が核兵器に転用可能な技術の商業利用を試みるステージの中心が日本にあるからです。逆に考えれば、新しい核時代のパンドラの箱が開くのを止めるチャンスを与えられているのが日本の市民です」。被爆国の市民が世界から核の脅威をなくす一番の力となって活躍する場が、今この日本にあるというのである。

同様なことは、かけがえのない宝である日本の憲法の改悪に反対することにも通じると言う。日本の市民が作り上げた憲法ではないという改悪理由に対し「この憲法を守ることで、より平和な日本と世界にすることができるのです」

そのためには、「改悪を批判するだけでなく、多くの市民が参加できる議論の場を作り、どうやって憲法が目指す社会を作るのかにウエートを置くことが大切だと思う」と語り、「第九条のような今の時代が必要とする最高に素晴らしい、日本と世界に役立つ理念を市民が本当に身につけ、世界に発信するのが大切だと思います」。

世界平和のために核をなくし、平和憲法を自分たちのものにするために「今何をしなければならないかを具体的に考えることができる大きなチャンスです」。

文／桐生広人

アイリーン・美緒子・スミスさん（東京生まれのアメリカ人・日本人ダブル）。1971年から74年にかけて、世界的にも高名な報道写真家で夫のユージン・スミス氏と水俣に滞在して水俣病を記録し写真集『水俣』などを刊行。スリーマイル島原発事故の取材経験から、1991年に日本の原発に反対する運動を京都で立ち上げ、後に名称を「グリーン・アクション」に変更。日本のプルトニウム利用計画を終わらせることによって、世界の核拡散を抑止し環境保護と自然再生エネルギー利用の道を切り開くことをめざして活躍する。URL www.greenaction-japan.org/

アイリーン・美緒子・スミスさん